ナショナルバイオリソースプロジェクト
平成19年度運営委員会委員長会議議事概要

1. 日時・会場

平成19年10月26日（木）14：00～17：00

TKP御茶ノ水ビジネスセンター　ホール14B

2. 出席者

推進委員会委員

副主査	小幡 裕一	理化学研究所バイオリソースセンター長
主査	小原 雄治	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所長
	城石 俊彦	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所 系統生物研究センター教授
	林　哲也	宮崎大学フロンティア科学実験総合センター教授
	福田 裕穂	東京大学大学院理学系研究科教授
	森脇 和郎	理化学研究所バイオリソースセンター特別顧問

中核的拠点整備プログラム・情報センター整備プログラム

（実験動物マウス）	吉木 淳	理化学研究所バイオリソースセンター
	○米川 博通	東京都臨床医学総合研究所疾患モデル開発センター
（ラット）	庫本 高志	京都大学大学院医学研究科附属動物実験施設 （芹川代表代理）
	○森 政之	信州大学大学院医学研究科
（ショウジョウバエ）	山本 雅敏	京都工芸繊維大学ショウジョウバエ遺伝資源センター
	○多羽田 哲也	東京大学分子細胞生物学研究所
（線虫）	三谷 昌平	東京女子医科大学医学部
	○桂 勲	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所　（飯野委員長代理） 構造遺伝学研究センター
（ネッタイツメガエル）	矢尾板 芳郎	広島大学大学院理学研究科附属両生類研究施設
	○毛利 秀雄	東京大学名誉教授
（カイコ）	伴野 豊	九州大学大学院農学研究院
	○小林迪弘	名古屋大学生物機能開発利用センター　（前川委員長代理）

（メダカ）	成瀬　清	自然科学研究機構基礎生物学研究所	（長濱代表代理）
	○山下正兼	北海道大学大学院先端生命科学研究院	
（ニホンザル）	景山　節	京都大学霊長類研究所	（伊佐代表代理）
	○泰羅　雅登	日本大学大学院総合科学研究科	
（ゼブラフィッシュ）	岡本　仁	理化学研究所脳科学総合研究センター	
	○日比　正彦	理化学研究所発生再生科学総合研究センター	
（カタユウレイボヤ	佐藤　矩行	京都大学大学院理学研究科	
ニッポンウミシダ）	○野中　勝	東京大学大学院理学系研究科	
（シロイヌナズナ）	小林　正智	理化学研究所バイオリソースセンター	
	○岡田　清孝	自然科学研究機構基礎生物学研究所	
（イネ）	倉田　のり	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所 系統生物研究センター	
	○谷坂　隆俊	京都大学大学院農学研究科	
（コムギ）	遠藤　隆	京都大学農学研究科	
	○辻本　壽	鳥取大学農学部	
（オオムギ）	武田　和義	岡山大学資源生物科学研究所	
	○武田　真	香川大学農学部	
（藻類）	笠井　文絵	国立環境研究所	
	○田畑　哲之	かずさDNA研究所	（情報委員長兼藻類委員長代理）
（広義キク属）	近藤　勝彦	広島大学大学院理学研究科附属植物遺伝子保管実験施設	
	○日詰　雅博	愛媛大学教育学部	
（アサガオ）	仁田坂　英二	九州大学大学院理学研究院	
	○小野　道之	筑波大学生命環境科学研究科遺伝子実験センター	
（ミヤコグサ・ダイズ）	青木　俊夫	日本大学生物資源科学部応用生物科学科	（明石代表代理）
	○磯部　祥子	かずさ DNA 研究所	
（トマト）	江面　浩	筑波大学生命環境科学研究科遺伝子実験センター	
	○柴田　大輔	かずさDNA研究所	
（病原微生物）	亀井　克彦	千葉大学真菌医学研究センター	（三上代表代理）
	○北　潔	東京大学大学院医学系研究科	
（一般微生物）	辨野　義己	理化学研究所バイオリソースセンター	
	○渡邉　信	筑波大学生命環境科学研究科	
（大腸菌／枯草菌）	古谷　寛治	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所 系統生物研究センター	（仁木代表代理）
	○川岸　郁朗	法政大学工学部生命機能学科	（小笠原委員長代理）
（酵母）	中村　太郎	大阪市立大学大学院理学研究科	
	○大矢　禎一	東京大学大学院新領域創成科学研究科	

（細胞性粘菌）	桑山　秀一	筑波大学生命環境科学研究科	（漆原代表代理）
	○久保原　禅	群馬大学生体調節研究所	
（遺伝子材料）	横山　和尚	理化学研究所バイオリソースセンター	
	○宮崎　純一	大阪大学大学院医学系研究科	
（ヒトES細胞）	角　智行	京都大学再生医科学研究所	（中辻代表代理）
	○仲野　徹	大阪大学大学院生命機能研究科	
（ヒト・動物細胞）	中村　幸夫	理化学研究所バイオリソースセンター	
	○中畑　龍俊	京都大学大学院医学研究科	
（情報）	山崎　由紀子	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所 生物遺伝資源情報総合センター	
	菅原　秀明	情報・システム研究機構国立遺伝学研究所	
	（日本ノード委員会）	生命情報・DDBJ 研究センター	

○：運営委員会委員長

文部科学省

菱山　豊　　研究振興局ライフサイエンス課長

松尾　淳　　研究振興局ライフサイエンス課専門官

事務局

文部科学省研究振興局ライフサイエンス課

ナショナルバイオリソースプロジェクト事務局

3. 議事

１．開会

２．第２期ナショナルバイオリソースプロジェクトの概要と推進方策について

３．ＮＢＲＰのゴール（「2010 年世界最高水準」の具体的内容）に関する意見交換

４．第２期ＮＢＲＰ終了後の体制の検討に関する意見交換

５．実費徴収の拡大（ＭＴＡの整備を含む）に関する意見交換

６．運営委員会委員長会議の実施方法、シンポジウムの開催等に関する意見交換

７．その他

８．閉会

4. 配付資料

資料　１　：ナショナルバイオリソースプロジェクト平成 19 年度運営委員会委員長会議出席者名簿

資料　２　：ナショナルバイオリソースプロジェクトについて

資料　３　：ナショナルバイオリソースプロジェクト推進委員会検討事項（抜粋）

資料　４　：平成 19 年度ナショナルバイオリソースプロジェクトのスケジュール

参考資料１：バイオリソース整備戦略のための報告書

参考資料２：ナショナルバイオリソースプロジェクトパンフレット（未定稿）

参考資料３：第３０回日本分子生物学会年会・第８０回日本生化学会年会合同大会案内書

1. **開会**

・開会の挨拶が小原主査からあり、引き続き文部科学省ライフサイエンス課菱山課長から挨拶があった。

・配布資料の確認が行われた。

・資料１に基づき、文部科学省より出席者のご紹介があった。
（辻本先生、大矢先生は都合により欠席）

2. 第２期**ナショナルバイオリソースプロジェクト**の概要と推進方策について

・資料２、参考資料１、参考資料２、参考資料３に基づき、第２期ナショナルバイオリソースプロジェクトの概要、ナショナルバイオリソースプロジェクトパンフレットの作成、BMB2007（第３０回日本分子生物学会年会・第８０回日本生化学会年会合同大会） について文部科学省より説明があった。

・情報センターの業務について国立遺伝学研究所山崎先生より説明があった。

・出席者からの質問はなかった。

3. **ＮＢＲＰのゴール（「2010 年世界最高水準」の具体的内容）に関する意見交換**

・資料３と資料４に基づき、ナショナルバイオリソースプロジェクト推進委員会での検討事項、平成１９年度ナショナルバイオリソースプロジェクトのスケジュールについて文部科学省より説明があり、続いて質疑応答及び意見交換が行われた。内容は以下のとおりである。

●マウスに関しては、数値目標はかなりクリアしている。リソースの重要性の順位づけがこれから問題になってくるだろう。（米川先生）

●シロイヌナズナでは、植物の基礎研究用のリソースとして、いろいろな種子の提供・保存・配布、データベースの充実に取り組んでいる。特に理化学研究所バイオリソースセンターでは、トレーニングコースといったものも含めていろいろ幅広く行ってきている。シロイヌナズナはインターナショナルなリソースとして非常に重要であることから、世界のリソースセンターやリソースプロジェクトともうまく連携を取りつつ、広がっていくようなやり方ができればと思っている。いろいろな植物種でバイオリソースの基盤が進んできているが、それが連携しつつやっていくことが重要である。例えば、データベースとしてのお互いに共通なものがどうあるかというようなことをまとめつつ、それがもっといろいろ広がっていくようなやり方もあると思う。（岡田先生）

●マウスに関して大事なことは、インターナショナルな連携と、わが国独自のバイオリソースをどうするかである。マウスで一番問題になってくるのは、知的財産権への対処である。（米川先生）

●今、議論の中心は数から質にシフトしている。日本だけが持つリソースもかなりあるが、

質的（例えば遺伝的）にきちんと吟味した科学的データによって、かなり質的な評価が定着するのではないかと思う。（吉木先生）

●日本の税金でやっているのだから、納税者に対する説明責任としては国内の研究者コミュニティに対して最もよく生かされるのが当然のことだが、世界最高水準という言葉を出した途端に、素晴らしいリソースであればあるほど国外からの需要が高くなる。この表裏の関係を良しとするかどうかが議論の分かれ目ではないか。（城石委員）

●海外からの需要に対して無償で渡すのがルールなのかどうかによっても違うだろう。自由に研究しようという考え方もあるし、知財を確保することができればそれは説明できると思う。そのあたりはケース・バイ・ケースではないか。（文部科学省）

●コムギの材料は海外からの需要の方が多い。情報の公開についても年度内に出たマーカー情報は年度末には公開することを前提でやっている。世界最高水準と言った段階でインターナショナルなものになるべきだと思っていた。そこをはっきりさせないと課金についても同じことになる。（遠藤先生）

●こういうプロジェクトも、国内はともかく、外国にリソースを出すときは、ロイヤリティーではないが相応のものを頂いてもいいのではないか。研究者コミュニティとしての世界最高水準ということについては、私個人としては、最高水準の株なりリソースをスムーズにみんなに供給できることが一番だと思う。その最高水準の株とは、一つは数、網羅性ということだろう。（久保原先生）

●世界最高水準というときに一番大切なのは、この事業が世界の研究者コミュニティからどれだけ尊敬されているか、どれだけ存在感を持たれているかという、数字にならないことだと思う。それ抜きに語ってはいけないことではないかと思う。（桂先生）

●ショウジョウバエの場合、膨大な遺伝学的コレクションなしには研究が進まないことから、昔から世界的にストックセンターを非常に大事にしてきた。今のところ、いわゆる最高水準という意味では、アメリカのブルーミントンにある巨大なセンターを系統数では抜いているのではないか、少なくとも量的にはそういう形になっている。

世界中で重要な系統をフレンドリーに融通してもらって研究するという歴史があり、それがあまりにも当たり前になっているため、どこのセンターからもらったということが書かれていない論文もある。それが先日の運営委員会でも問題になった。（多羽田先生）

●微生物では、ＯＥＣＤの質的な面でのスタンダードがかなり先行して進んでおり、少なくともＩＳＯ9001 を取得して品質マネジメント規格としてしっかり位置付けることが、国際的なネットワークに乗るときの最低必要な水準となっている。新規の細菌類を発表するときは、培養株を少なくとも２カ国の公的なカルチャーコレクションに預けなくてはいけない。そこにどれだけ微生物のカルチャーコレクションがコントリビューションしているかというところも、信頼性という意味で問われてくる。リソースによって、可能な限り客観的かつ国際的な評価指標をとらえて評価していく必要があるのではないかと思う。（渡邉先生）

●病原微生物の場合、バイオテロなどのこともあり、どこにでも提供していいというものではない。世界最高水準というキーワードがあるとすれば、これまでにわれわれが蓄積してきたものの確保、クオリティーの問題、研究の対象にきちっとなりうるものの確保というあたりをポイントとしてやっていきたい。（北先生）

●世界最高水準をオオムギで考える場合、量、系統数が多いことはもちろんだが、中身の問題、特に付随情報が大事だと思う。どんな耐病性の遺伝子を持っているのか、形態がどうなるのか、さまざまなキャラクタライゼーションをやって、充実したデータベース的な特性評価を幅広くやっているという付随情報が、種とセットでそろっていることが大前提ではないかと思う。（武田(真)先生）

●結局はクオリティーが国際的に認知されているかがポイントとなると思う。クオリティーを何らかの基準で目に見える形で示せるとよいのではないかと思う。（小原主査）

4. 第２期ＮＢＲＰ終了後の体制の検討に関する意見交換

●細胞の場合には、まがい物が混ざっていることがあり、細胞株を全部クリーンアップし、質的にも担保してＮＢＲＰがお墨付きを与えた細胞として出していく方向を考えている。日本の研究者はきちっと標準的なものを使っていると世界に示していくことが一番重要ではないかと思う。（中畑先生）

●運営費交付金が減って大学運営が厳しい中で、大学の執行部にバイオリソースに対する理解を得るのは非常に難しい。やはりリソース事業を理解していただき、その評価を高めていかないと、なかなかこの問題は解決できないのではないか。（伴野先生）

●もし大学でやるならばそれに対してきちっと支援をしていくという体制を、この５年間のうちに作り上げなければいけない。大学では、今の段階ではかなりボランティア的である。一つの研究室が非常に苦労してやっている。資金がなくなったら絶対できない状態になる。（小林(迪)先生）

●リソース事業に対する支援は文科省の一つの課で済む問題ではない。先生方の評価の問題は、文部科学省ではなく先生方の問題である。それを国にどうにかしろというのは、国が評価していいのかという話になりかねないので、よく考えていただきたい。ただ、文部科学省全体として仕組みについて考えなければいけないというのは、そのとおりだと思う。ライフサイエンス課だけでは微力なので、いろいろな関係の課と話をしつつやっていきたいし、先生方もいろいろな機会に他の課にも働きかけていただきたい。リソースの在り方として、一つの研究室だけがやっていくのでは散逸してしまうケースもあるので、きちんと大学の中で組織を作ってやることも考えなければいけない。その一つが、理化学研究所のバイオリソースセンターであり、大学共同利用機関法人である。大学の支援は文科省から働きかけても本質的な解決にはならず、実際にリソース事業を行ったり、リソースを使用している先生方ご自身が動く必要がある。競争的資金でやるというのは緊急避難的な話であって、しっかりと基盤を育てなければいけないということ

は多分先生方もわれわれも思っているところで、それをどうやっていくかだと思う。（文部科学省）

●研究者コミュニティとしてリソースの中心となるセンターはないと困る。本来はコミュニティ全体がボランティアでやるべきことだが、ある程度大きくなるとどこかにセンターを作らなければならない。そのための予算は誰かが持ってきてくれるわけではないので、研究者コミュニティの中で本当にやりたいという熱意を持ってリソース事業を後押していかなければならない。（小原主査）

●トマトの場合は、割と大学の支援を含め、サポートをいただいている。それから、むしろ大学の方がこれを上手に使って執行部が概算要求していくという使い方もできるだろう。（江面先生）

●ミヤコグサの場合、大学からは施設の支援だけでなく、リソース整備に必要な人材の育成についても支援を受けている。コミュニティはこのプロジェクトに入れていただく前からできていたので、常に密な連携が取れており、外国へのリソース提供の問題も、国内の連携が密であるがゆえに国内の研究者のほうが情報収集で優位に立ち、何となくバランスが取れている。逆に、ダイズの方は、このプログラムが始まって、ようやく今、コミュニティづくりをしているところである。ダイズはゲノムプロジェクトも始まったので、今後そちらのクオリティーづくりからプログラム終了後の対応につなげていく必要があり、そこが課題だと考えている。（青木先生）

●今後の体制で一番大事なのは研究コミュニティの支援だと思う。ぜひ研究コミュニティから、これをなくしたら研究が進まないという声を推進委員会に上げてほしい。２番目は人材である。誰かが退官した後、次の人が現れるような体制を作っていただきたい。３番目は母体の支援である。大学がこの事業を受けることによってインセンティブがあるような仕組みを作りたい。間接経費という形で資金は流れていると思うが、必要であればナショナルバイオリソースという看板を作って大学当局の認知を確かなものにするということも考えてもよいのではないか。（小幡副主査）

●コミュニティと一体となってやっていかなければ意味がない、そうしないと開ける道も開けないと思う。そういう意味で、今回、運営委員長会議、コミュニティの代表も一緒に入ってやるというのは画期的ではないかと思うので、ぜひ今後ともよろしくお願いしたい。（小原主査）

5. 実費徴収の拡大（ＭＴＡの整備を含む）に関する意見交換

●実費徴収はしたいが、そのアカウンティングをどうするかがよく分からない。（成瀬先生）

●臨床研は非常に厳しくて、本当にそういった研究機関が必要なのかという議論から始まっていて、リソースなどはその後の問題である。その中でわれわれはＭＴＡをきちんとやり、少なくとも実費プラス２割ぐらいを頂いて、身の回りのものを買っている。そう

しないとほとんどどこからもサポートを受けていないので実際問題として回っていかない。（米川先生）

●ショウジョウバエの方では、本実費だけを頂くという形にしている。ショウジョウバエを育てるところはバイオリソースの経費であり、外からの依頼に対して、ハエは無料、飼育瓶と餌代として１系統当たり 30 円の実費のほかに、郵送費と最初の登録料、クレジットカードの諸手続き料として１年間の登録費 1,430 円を頂いている。提供依頼者がネットで依頼すると、系統名が全部こちらに流れてくるので、それを箱詰めして、発送する直前にもう一度クレジットカードがＯＫかどうかを調査する。そのようにすべてクレジットカードだけでやっている。（山本先生）

●そういうことを引き受けてくれるところがなかなかない。（成瀬先生）

●国としては、お金をまず入れてから物を送るという原則は絶対に曲げられないということだったが、クレジットカードでないといろいろな支払いを希望してきて、その対応が非常に大変になるということで、アメリカのストックセンターからサジェスチョンを得て、大学の事務と議論してクレジットカードですべて行えるようになった。（山本先生）

●今後、そういうケースが増えてくるだろう。その際に、幾つか留意しなければならない問題として、リソースによっては民間からのリクエストが結構あると思うが、アカデミックとプライベートセクターで差を付けるのかどうか。それから、国内と海外は全く同じ条件でやるのかどうかということもあるかと思う。（城石委員）

●理研全体では、企業からは 30％増しで頂いているが、これで利益を生んでいるのではなく、必要な経費を利用者に負担していただいているというスタンスである。リソースは他機関の研究者からの寄託が大半で、中核機関が自ら利益を生むのは非常に難しいが、一定の実費を頂かないと提供が増えれば増えるほど事業が縮小せざるを得ないことになるので、それは避ける必要がある。大学で難しいことは重々知っているが、そういう課金制度をぜひご検討いただきたい。財務省はこのプロジェクトに対して、いつまで続くか分からない後年度負担のようなものは縮小すべきだと言っている。それを跳ね返すためにも、提供すればするほど皆さんが楽になるような制度設計をしていただきたい。（小幡副主査）

●コムギの場合、実費といえば郵送料だけで、書留で送ったとしてもせいぜい数百円だ。それを課金する手間を考えると全く割に合わない。コミュニティは課金に反対である。（遠藤先生）

●ミヤコグサは種子が小さく自分の所で増殖するのが難しいが、現在バイオリソースからは規定の量しか送られてきていない。お金を払ってたくさんもらえるのなら、その方がいいというのがコミュニティの意見だと思う。全員のコンセンサスを得たわけではないが、われわれのコミュニティとしては、課金されてもそれだけの値打ちはあると考えている。（磯部先生）

●コミュニティごとに成立すればやっていけばいいと思うが、「実費プラスアルファ」の

「実費」はいいとして、「プラスアルファ」は可能なのか。可能であれば、その利益を５年後の運営や大学の運営資金にも回せるかもしれない。また、しばらくの間はコミュニティごとの実情に沿って、それぞれで決めていっていいのか。（久保原先生）

●大学の当局がライセンス契約を結んで、大学当局が儲けるというのは、ＮＢＲＰの範疇ではない。（小幡副主査）

●かかった額以上にもらって初めて利益になるが、実費をどこまで見るのか。あくまで来ているお金の中で当然準備をしているわけだから、ＮＢＲＰでは利益を生むということはない。ただ、実費をどこまで見るかはいろいろなケースがある。立派な箱を作れば高くなるが、人件費に関しては、今は委託費でもらっているのでそれを乗せるということはおかしいことになってくる。（小原主査）

●実費や利益を考えるとき、ＮＢＲＰでリソースを収集するお金と、保存するお金と、提供するお金を委託費として出しているという話は、そのプロジェクトとしての自己完結性の中で整理する必要がある。（文部科学省）

●ニホンザルは繁殖がすごく難しく、単価を計算すると１頭 100 万円位になるといわれている。霊長研では他の予算でかなり大きな繁殖場を整備したので、明らかに５年後、その維持が難しい状況になってくる。従って、サルをある一定の価格で研究者に供給して、その一部を維持費に繰り入れないと破綻するだろうと考えている。その試行として、今、何種類かのサルを霊長研独自で有償で供給するということをホームページに掲載して始めている。１頭数十万円という価格だが、需要はある。そのように将来的に安定した格好でやっていかないと、国からの援助があったとしても、リソースそのものがつぶれてしまうという状況になる。ニホンザルは将来的に日本の脳科学を支えていくという使命を持ち、世界的水準を高めるにはどうしても経費がかかる。（景山先生）

●ショウジョウバエはアメリカで起こった学問分野で、手紙一つで自由にリソースを配り合うことで研究が発展してきた。そういうベースがあるので、課金という話が出ると必ず、そのトラディションがどうだという話が出てくる。そこで、できるだけバイオリソースプロジェクトでやっている部分と提供の課金の部分とを外そうと考えて、発送するための容器、大学の情報科学センターの費用などは大学で賄ってもらい、利用者から入ってくるお金はショウジョウバエの方には入らず、大学の方にお金が入ってくる形にしている。一方、バイオリソースプロジェクトでは、提供の依頼がなくてもあってもショウジョウバエという系統は維持することが仕事であり、バイオリソースプロジェクトの本来の在り方の中で系統が存在している。それは無料で配布するという整理をして、できるだけ１系統の単価を安く計算するというやり方をしている。（山本先生）

●研究者コミュニティでは文化があって、課金となるときつい議論があるが、方向としては実費の課金はしないともたない。その辺ははっきりしておいた方がよい。（小原主査）

●実費の負担は、総合科学技術会議、財務省を含めて言ってきているので、避けられないと思っている。（文部科学省）

●作物の世界では、種子を配布してお金を取っているケースは恐らくないと思う。ありきたりの系統種子の場合であれば謝辞を書いてもらう程度だが、実験系統のように非常にユニークな種子の場合は大抵共著にしてもらう。民間の場合は、非常にユニークな材料の場合は共同研究をオファーしていただき、例えば特許を取るようなときに共同出願していただく。いずれにしても有償ではない。（武田(和)先生）

（リソースを利用した研究の成果の把握）

●微生物の場合は、論文ではマテリアル＆メソッドに、どこの機関の何番という培養株を使ったと書けばよい。下手に謝辞に書くと不適当な分譲制限項目になり、その論文自身がアクセプトされないので、acknowledgment というのは微生物の場合は当てはまらない。（渡邉先生）

●ニホンザルの場合は、供給をするときに条件の中にそれを入れ込んでいる。それだけの誓約書がある。（泰羅先生）

●リソースの acknowledgment をしていただくという前提で、分かりやすいナンバーを付ければ、検索してチェックもできる。新しいリソースを使おうとする場合、そういうやり方もあるのではないかと考えている。（柴田先生）

●新規微生物の基準株を提案する場合、acknowledgment を付けてほしいという制限を寄託証明書の中に入れると、レフェリーは一切受け付けないというシステムになっている。ただ、自由に公開で使えるような条件を使いなさいとなっている。株はＪCMナンバーを入れてもらえばそれで済むということである。（辨野先生）

●ショウジョウバエでは、使った人がより積極的に結果を報告してくれるよう、送るときにネット上で合意のチェックをする準備をしている。系統が２万幾つかあるが、そのすべてのジェノタイプがリストとしてデータベース化されている。利用者がそのリストを探すときにレファレンスが付いていれば、引用されるチャンスは非常に高くなる。研究者には、自分の論文を引用されたいという希望があるはずなので、系統選択のときに、次の利用者がそれを目にして少しでも引用の頻度を高めるようにして、報告をしようという意気込みを高める策を練っているところである。（山本先生）

●科研費では、基本的に論文の acknowledgment にこの研究成果は日本の研究費のサポートによってできているということが分かるよう、科研費ナンバーを入れてもらうようにお願いしている。バイオリソースの場合、リソース自身が成果ではなく、それが使われて出てきたものが成果になるので、どう使われたのかをわれわれが把握しようとすると相当中核機関の負担が大きくなる。何らか公的なシステムがあればいいのではないか。また、これが基準的なものだということを証明するために、少なくともメソッドか acknowledgment かに統一的に書くようにできればいいのではないか。また、あるリソースを全く違う分野の先生が知って、研究成果を上げるということもあり得るので、報告のホームページ等で情報を知ることができれば、研究者コミュニティがもう少し広がるのではないか。（文部科学省）

●書き方や例文など、ＮＢＲＰで統一的なものがあった方がインパクトは高いのではないか。（遠藤先生）

●ここにいる先生たちはいろいろな雑誌の論文をレビューしていると思うので、マテリアル・メソッドのところで由緒が分からないようなペーパーは、ぜひ指導を願いたい。そうすればこの事業も見える形になると思う。（小幡副主査）

6. 運営委員会委員長会議の実施方法、シンポジウムの開催等に関する意見交換

●やはり何らかの交流のチャンスがあった方がいいので、年１回くらい運営委員長会議を開き、一方で分野ごとの分科会的なものがあった方がいいかと思う。さまざまな工夫の共有ということで、もう少し規模の小さな機動的なものを作っていきたい。（小原主査）

●研究者の相互交流については、現状で言うとサイトビジットのようなものもあるし、テクニックとしてのもので勉強会が成り立つのであれば、そういったものを作ってみるということもあるだろう。（文部科学省）

●今回からの基盤技術整備プログラムの中には、凍結の仕方、輸送の仕方など、ほかのリソースにも役立つであろう技術開発が入っている。こういうことに関しては、普通の成果公開だけではなく、積極的に担当の方々での共有が必要なので、こういうチャンスを持ちたい。それ以外にも、クレジットカードのことも含めて、もう少し交流してノウハウを共有するといいことがたくさんあると思う。フィードバックをぜひいただきたい。もちろんメーリングリストなどは簡単に作れるが、推進委員会で検討して場を作りたい。シンポジウムの開催等についても、学会等で宣伝してやっていく。いろいろな学会で展示をやっており、今年は特に分子生物学会と生化学会の合同大会にもブースを出展するので、ご協力をお願いしたい。（小原主査）

●展示会や一般向けなどに展示するときには、ＮＢＲＰと銘打って宣伝してもよいのか。（桑山先生）

●もちろんよい。ポスターの作成など、お手伝いできるかもしれない。（小原主査）

●事務局のホームページ等で紹介もできるので、事前に連絡をいただきたい。（文部科学省）

7. その他

●ナショナルバイオリソースプロジェクトシンポジウムは3月中旬あたりになる可能性が高い。決まり次第連絡するのでスケジュールを空けておいてほしい。（城石委員）

●今、日本に微生物関係の学会が大小 30 以上あり、9 月 25 日に日本微生物学連盟を作った。微生物関連のバイオリソースは当然その中で非常に重要な位置を示すので、ぜひ積極的に参加していただきたい。広報にもよいし、ユーザーの広がりも相当できるのではないか。そういう意味で、微生物という分科会ができればよいのではないかと思う。（渡邉先生）

●BMB2007 の展示は、従来どおり、経済産業省、厚生労働省、農林水産省のリソースの方にも来ていただいてやっていただく。やはりここが一番の大きな核なので、他省の方も参加していただいて交流を深める場を作るので、各リソースにおいても一層下のレベルで交流を深めておいていただきたい。オールジャパンというのは必ずキーワードとしていわれるので、そういう実のある活動をしていただければと思う。（小原主査）

8. 閉会